琉球の「食人」風聞の歴史的構造

弘末 雅士:天理大学国際文化学部

東南アジア島嶼部の歴史を専門とする筆者は，北スマトラやニコバル・アンダマン諸島，ニアス島，ケダー，カリマンタン，モルッカ諸島など，交易上貴重な産品を産出したりあるいは東西交易路の要衝であった地に，しばしば古くから「食人」の風聞が存在したことに注目している。「食人」風聞は，自文化と異文化とを分化する際の重要なメルクマールとなるばかりでなく，誰がその風聞を流布させたのかを考察することで，そこでの交易活動のあり方に，貴重なデータを提供してくれる。この意味で，琉球の「食人」風聞も興味深い事例を提示してくれているように思われる。

琉球の「食人」風聞は，７世紀の『隋書流求伝』に登場して以降，13 世紀までしばしば中国側，日本側の文献に登場した。この「流求」が今日の沖縄かあるいは台湾であるかをめぐり論議されたことがあるが，日本側には９～14 世紀始めにおいて南島に「人喰い」が居住するという一般的イメージが存在していた。筆者は，「食人」が実際に慣行として存在したのかどうかには，直接的関心を払わない。多くが風聞で実証が困難であるし，「人喰い」風聞が存在したという事実の方が，より重要であると考えるからである。そして 14 世紀後半になり，琉球の王国が明朝に朝貢し始め，自らが海洋王国を自認し東南アジアや東アジアとを介在する役割を果たし始めると，「食人」風聞は消滅する。

７～13 世紀の間の沖縄は，日本や中国からは異域とみなされていたが，日本や中国との交渉がほとんどなかったことを意味するわけではない。むしろ日本と中国，あるいは東南アジアと東アジアとを介在する地としての役割が生じ始めた時期である。『日本書紀』『続日本紀』によれば，７・８世紀頃に琉球の一部を含む九州以南の島々の住民がヤマト国家に挨拶にやって来ている。また遣唐使もしばしば九州以南の島々に漂着した。12 世紀以降南宋の時代になると，東シナ海の海洋交易活動は一層活発となるとともに，中国人商人が南シナ海やインド洋にも赴くようになり，琉球に立ち寄った商人数は増加したことが容易に推測される。沖縄は 11～13 世紀には，グスク時代とよばれる水田耕作が普及し始め，交易も活発となり，権力者が出現する時代を迎えている。

12～13 世紀に東アジア海域世界において中継地として重要な役割を果たし始めていた琉球に対し，むしろ日本人は「人喰い」島のイメージをいだき続けていたといえる。沖縄は食糧を供給でき，また造船用建材となる木材を産し，金，銀，銅そして硫黄を豊富に産する日本と近接し，かつ東アジアと東南アジアとを介在しうる位置にあった。日宋間，日元間のあるいは東アジアと東南アジアとの間の貿易を支配的に司っていた中国人を主とする私貿易商人にとり，重要な中継地となりつつあった琉球は，日本人や他の外国人商人を介在させたくない地であった。「食人」風聞はこのコンテクストにおいて，重要な役割を果たす。1243 年に五島から船出して宋をめざした船が，琉球国に漂着して，食人されるかもしれぬ恐怖を記した『漂到流球国記』や，商人が訪れないとされた黄金の島チパング諸島で食人が一般的に行われていることを記したマルコ・ポーロの『東方見聞録』を読むとき，こうしたイメージ作りがきわめて効果的になされていたことがわかる。

「食人」風聞は，決して交易活動が無秩序で行えない状態を示したものではない。むしろ，現地人と一部の人々との独占的関係が形成されていることを示す場合が多い。琉球の「食人」風聞もこの点で，きわめて興味深い事例を提示してくれているように思われるのである。